**銅鑼**

銅鑼は、主に茶道（茶の湯）で使われる小型の金属製の鉦（かね）である。茶人が銅鑼を鳴らして茶室に入る時間を知らせ、その深く長い余韻は、集まりに適切な瞑想的なトーンにするためのものである。銅、錫、鉛、銀を精密に配合した「砂張（さはり）」という合金が、この響きを生み出すのである。

銅鑼はロストワックスという技法で、手作業で鋳造される。鋳型を壊して中の冷えた金属を取り出す必要があるため、職人は1つ1つ新しい鋳型を作るのである。職人が磨き、時にはハンマーで叩いて仕上げる。銅鑼の大きさや厚み、装飾品によって音の高さや音色が変わるので、それを見極めるのも熟練の技である。完成した銅鑼は、「銅鑼掛（どらかけ）」と呼ばれる木製の枠に吊るされる。

銅鑼作りは、1955年に重要無形文化財に指定された。金沢市出身の三代・魚住為楽（1937-）は、2002年に銅鑼作りの技術で重要無形文化財保持者に認定された。1955年に銅鑼作りの技術で保持者に認定された祖父の初代・魚住伊樂（1886-1964）から、その技術を受け継いだ。